西百塚山19号墳発掘調査報告
― 大草丘陵古墳群の調査（１）―

吉松　優希　守岡　正司
考古基礎資料調査研究（墓制調査）

はじめに

島根県古代文化センターと島根県教育庁埋蔵文化財調査センターでは、考古資料を基に地域特性や地域形成の過程や変遷を考察することを目的に調査研究事業「考古基礎資料調査研究事業」を行っている。その研究事業の１つに「墓制調査」があり、これまでもその成果を公表してきた。本稿では平成27年度から行っている大草丘陵古墳群（西百塚山古墳群）の調査成果を報告する。

なお、調査は県内の重要遺跡の保護活用を図ることを目的としており、文化庁の国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金（(史）県内遺跡発掘調査等事業）を受け、実施した。

体制・経過

【客員研究員】（五十音順）

岩本　崇（島根大学法文学部准教授）、大谷晃二（島根県立松江北高等学校教諭、現島根県立三刀屋高等学校教諭）、大橋泰夫（島根大学法文学部教授）、村田裕一（山口大学人文学部准教授、平成29年度から）、吉田　広（愛媛大学ミュージアム准教授）

【事務局】

2015（平成27）年度

丹羽野　裕（文化財課長）、佐藤正範（古代文化センター長）、廣江耕史（埋蔵文化財調査センター所長）、渡部宏之（同総務課長）

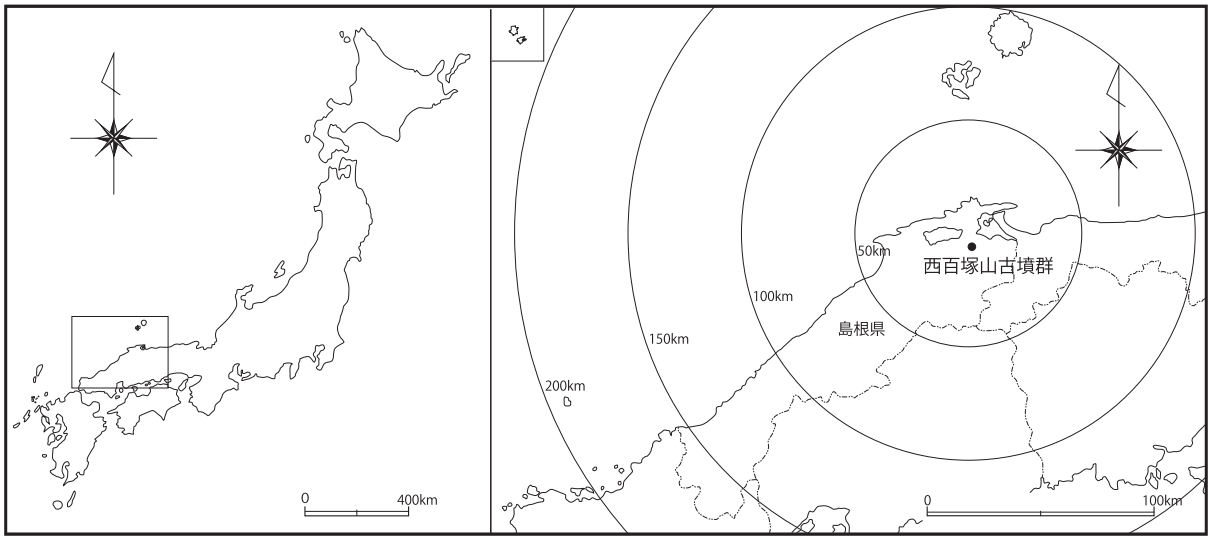
2016（平成28）年度

丹羽野　裕（文化財課長）、廣江耕史（文化財課管理監・古代文化センター長）、萩　雅人（埋蔵文化財調査センター所長）、渡部宏之（同総務課長）

2017（平成29）年度

丹羽野　裕（文化財課長）、廣江耕史（文化財課管理監・古代文化センター長）、萩　雅人（埋蔵文化財調査センター所長）、石橋　聡（同総務課長）

2018（平成30）年度



第１図　西百塚山古墳群の位置

萩　雅人（文化財課長）、稲田　大（古代文化センター長）、椿　真治（埋蔵文化財調査センター所長）、石橋　聡（同総務課長）

2019（平成31・令和元）年度

萩　雅人（文化財課長）、中島政顕（古代文化センター長）、椿　真治（埋蔵文化財調査センター所長）、和田　諭（同総務課長）

2020（令和２）年度

萩　雅人（文化財課長）、中島政顕（古代文化センター長）、椿　真治（埋蔵文化財調査センター所長）、和田　諭（同総務課長）

【調査担当者】

平成27年度

（古代文化センター）間野大丞、岩橋孝典、稲田

1.(県)西百塚山古墳群　2.(県)東百塚山古墳群　3.(県)古天神古墳　4.(県)大草岩船古墳　5.天満谷遺跡　6.(国)安部谷古墳　7.湯田横穴墓群　8.湯谷横穴墓群
9.大円寺上古墳群　10.和田平横穴墓群　11.才光寺横穴墓群　12.大屋敷･才台垣遺跡　13.神田遺跡　14.四配田遺跡　15.(国)出雲国府跡　16.大坪遺跡　17.真名井遺跡
18.大谷横穴墓群　19.聖岩遺跡　20.大谷遺跡　21.向小紋遺跡　22.上小紋遺跡　23.才塚遺跡　24.大平遺跡　25.間内遺跡　26.上竹矢古墳群　27.廻田古墳群
28.茶臼山城跡　29.小谷横穴墓群　30.(県)御崎山古墳　31.上立遺跡　32.(県)岩屋後古墳　33.(国)岡田山古墳　34.団原Ⅱ遺跡　35.団原古墳　36.小無田遺跡
37.(県)小無田Ⅱ遺跡　38.寺の前遺跡　39.(県)山代郷南新造院跡(四王寺跡)　40.内堀石塔群　41.三宅宅角柱状石塔　42.市場遺跡　43.山代沖田遺跡　44.光泉寺遺跡
45.黒田館跡　46.下黒田遺跡　47.団原遺跡　48.団原Ⅲ遺跡　49.黒田畦遺跡　50.下黒田Ⅱ遺跡　51.川原宮Ⅲ遺跡　52.川原宮Ⅱ遺跡　53.川原宮遺跡　54.大庭植松遺跡
55.(国)山代郷正倉跡　56.神魂神社参道遺跡　57.出雲国造館跡　58.中西遺跡　59.大石古墳群　60.大石横穴墓群　61.平古墳群　62.大庭廻田遺跡　63.東淵寺古墳
64.外屋敷遺跡　65.大庭小学校校庭遺跡　66.B3遺跡　67.B9遺跡　68.B10遺跡　69.B12遺跡　70.B11遺跡　71.B8遺跡　72.B28遺跡　73.B18遺跡　74.B21遺跡
75.土地田遺跡　76.下ノ原古墳群　77.向山１号墳　78.茶臼遺跡　79.柳堀遺跡　80.大庭原ノ前遺跡　81.(国)大庭鶏塚古墳　82.(国)山代二子塚古墳　83.(国)山代方墳
84.山代原古墳(永久宅後古墳)　85.狐谷古墳･横穴墓群　86.来美南遺跡　87.井出平山古墳群　88.岩井谷遺跡　89.(国)山代郷北新造院跡(来美廃寺)　90.来美墳墓
91.(県)十王免横穴墓群　92.寺山小田遺跡　93.平所遺跡　94.南外古墳群　95.上谷遺跡　96.山代神社前遺跡　97.練兵場Ⅰ遺跡　98.練兵場Ⅱ遺跡　99.石台遺跡
100.勝負遺跡　101.石台Ⅱ遺跡　102.東光台古墳　103.(国)石屋古墳　104.荒神畑古墳　105.井ノ奥1号墳　106.井ノ奥4号墳　107.間内越墳墓群　108.手間古墳
109.竹矢岩船古墳　110.才ノ峠遺跡　111.灘山古墳　112.観音寺古墳群　113.角森遺跡　114.迎接寺裏山古墳群　115.さっぺい遺跡　116.的場遺跡　117.原前遺跡
118.出雲国分尼寺跡　119.法華寺前遺跡　120.中竹矢遺跡　121.(国)出雲国分寺跡　122.布田遺跡　123.夫敷遺跡　124.大木権現山古墳群　125.島田遺跡
126.寺床遺跡　127.堤谷古墳群　128.四ツ廻横穴　129.屋台垣横穴墓群　130.揖屋神社古墳　131.五反田遺跡　132.大鳥才ノ神遺跡　133.長廻横穴墓群　134.島田池遺跡
135.岸尾遺跡　136.後谷横穴墓群　137.後谷池古墳　138.荷延古墳群　139.栗坪古墳群　140.須田神社境内遺跡　141.赤廻遺跡　142.古城山遺跡　143.古城山古墳群
144.古城山横穴墓群　145.古城山城跡　146.春日遺跡　147.鳥越寺院跡　148.鳥越古墳　149.以下谷古墳　150.姫津遺跡　151.姫津古墳群　152.姫津谷横穴墓群
153.三反田A古墳群　154.神子谷古墳　155.天王横穴　156.春日城跡　157.魚見塚古墳　158.朝酌岩屋古墳　159.朝酌小学校前古墳　160.朝酌小学校校庭古墳
161.朝酌上神社跡古墳　162.廻原1号墳　163.観音山2号墳　164.観音山1号墳　165.廟所古墳　166.山辺遺跡　167.鞍切遺跡　168.遅倉横穴墓群　169.九日宮古墳群
170.鷹沢A遺跡　171.別所遺跡　172.別所古墳　173.勝田谷窯跡　174.岩穴平遺跡　175.明曽窯跡　176.イガラビ古墳群　177.イガラビ遺跡　178.池ノ奥古墳群
179.池ノ奥C遺跡　180.寺尾窯跡　181.後平横穴墓群　182.廻谷窯跡　183.山巻古墳　184.ハバタケ窯跡　185.岩汐窯跡　186.阿弥陀寺古墳　187.阿弥陀寺裏山古墳群
188.明事山古墳

第２図　西百塚山古墳群と周辺の遺跡分布図（S=1/50,000）

陽介、田中　大

（埋蔵文化財調査センター）池淵俊一、是田　敦、神柱靖彦、岩本真実

平成28年度

（古代文化センター）岩橋孝典、東山信治、井谷朋子、田中　大

（埋蔵文化財調査センター）池淵俊一、是田　敦、仁木　聡、神柱靖彦、岩本真実

平成29年度

（古代文化センター）原田敏照、岩橋孝典、東山信治、井谷朋子

（埋蔵文化財調査センター）池淵俊一、大庭俊次、是田　敦、仁木　聡、神柱靖彦、吉松優希、岩本真実

平成30年度

（古代文化センター）松尾充晶、東山信治、原田敏照、岩本真実

（埋蔵文化財調査センター）大庭俊次、是田　敦、守岡正司、仁木　聡、神柱靖彦、吉松優希

平成31年度・令和元年度

（古代文化センター）松尾充晶、原田敏照、岩本真実

（埋蔵文化財調査センター）角田徳幸、大庭俊次、深田　浩、稲田陽介、間野大丞、守岡正司、吉松優希、岩崎孝平、真木大空

令和２年度

（古代文化センター）松尾充晶、勝部智明、是田　敦、岩本真実

（埋蔵文化財調査センター）角田徳幸、守岡正司、深田　浩、岩橋孝典、伊藤　智、東森　晋、廣江耕史、吉松優希

【調査協力者】

岩坂林産協同組合、大草地区自治会、大草森林組合、勝部　昭、鈴木一有、島根県立松江北高等学校歴史愛好会、田中　大、花谷　浩、埴輪研究会、曳野律夫、矢野俊雄、吉岡弘之、六所神社、渡邉正巳

１．遺跡の位置と歴史的環境

西百塚山古墳群は、茶臼山の南～東にかけて展開する意宇平野南縁に東西に延びる大草丘陵（標高30～90m）に所在する大草丘陵古墳群中に位置する。丘陵東側は谷を挟んで、春日丘陵が広がる。丘陵の北～西にかけて意宇川が蛇行してめぐる。

大草丘陵古墳群は当古墳群のほか、総数約150基から構成される東百塚山古墳群、東端には安部谷古墳群や安部谷古墳（横穴墓群）が所在する。

さらにこれらの古墳群内には、四隅突出型墳丘墓である東百塚山20号墓や最古段階の石棺式石室を主体部とする古天神古墳（方方・27m）、舟形石棺を主体部にする大草岩船古墳（方方・25m）なども含んでいる。

西百塚山古墳群は、2013（平成25）年に本庄考古学研究室や大谷晃二氏によって踏査が行われ、古墳群の実態が明らかにされた。これらの成果から67基の古墳と１基の横穴墓が確認されている(1)。その後、松江北高校歴史愛好会によって継続的に測量調査が行われている（松江北高校歴史愛好会2017・2019）。発掘調査が行われた古墳は、1960（昭和35）年に松江高校考古学部によって調査された七曲古墳（西百塚山２号墳）のみである（松江高校考古学部1961）。

このように西百塚山古墳群を含む大草丘陵古墳群は、総数200基以上の古墳や横穴墓が密集し、県下最大の群集墳と言っても過言ではない。

当地域周辺の古墳時代について概観すると北側に広がる意宇平野には、夫敷遺跡や出雲国府跡下層遺構群などが知られている。夫敷遺跡では自然河道が検出されているほか、古墳時代前期～中期後葉にかけての多数の土師器や韓式土器が出土している。このほか、神田遺跡や四配田遺跡などでは古墳時代中期の灌漑水路が検出されている。出雲国府跡下層では、首長居館状の方形区画遺構が確認されており、水利開発拠点としても、大規模な平野開発が進められていた可能性が指摘されている（池淵2015）。

古墳に目を向けると、古墳時代前期後葉に茶臼山東麓に大和北部型と呼ばれる出雲最古の埴輪を備える廻田１号墳（方円・58m）が築造される。このほか近年発掘調査が行われた上竹矢７号墳（方円・66m）は埴輪や葺石をもたないことから廻田１号墳に

先行するものと位置付けられている。出雲国府跡下層で方形区画遺構が設けられるのとほぼ同時期に大橋川沿岸では、廟所古墳（方・68m）や石屋古墳（方・42m）などの大型方墳が累代的に築造され、墳形や王陵系埴輪の存在など、畿内王権との関係が指摘されている（仁木2015）。古墳時代中期末になると大橋川沿岸では竹矢岩船古墳（方方・50m）や井ノ奥４号墳（方円・57m）が築造されるなど、墳形に変化が見られる。古墳時代後期になると墓域を茶臼山西麓へ移す。６世紀中葉には山代二子塚古墳（方方・94m）が築造され、出雲地域の古墳時代社会を考える上で重要な画期となる。周辺には東淵寺古墳（方円・67～70m）や手間古墳（方円・61m）のほか、中小首長と目される岡田山１号墳（方方・24m）、御崎山古墳（方方・40m）、古天神古墳（方方・27m）、岩屋後古墳（不明）、団原古墳（不明）が築造される。山代二子塚古墳以後の出雲東部の最高首長は向山１号墳（方・32×20m以上）、山代方墳（方・43×45m）、山代原古墳（永久宅後古墳：方・23m？）へと推移する。奈良時代には意宇平野に出雲国府が置かれ、名実ともに古代出雲の政治的中心地となる。

２．分布調査の成果

（１）調査の目的・経過

対象範囲は松江市大草町、八雲町、東出雲町にかけて位置し、安部谷横穴墓群以西の大草丘陵で、特に西百塚山古墳群から大草丘陵西端部までである。現地踏査は平成27年度～平成30年度の４カ年実施した。

（平成27年度）

11月25～27日に57か所の基準点測量を実施したほか、３月17、18日に西百塚山古墳群の尾根上を中心に踏査を行い、新たに横穴墓７墓などを確認した。３月29日開催の平成27年度第２回客員研究員共同検討会で報告した。

（平成28年度）

３月16日に西百塚山古墳群の南側斜面を中心に踏査を行い、横穴墓17墓を確認した。３月23日開催の平成28年度第２回客員研究員共同検討会で報告した。

（平成29年度）

３月７日に西百塚山古墳群が存在する大草丘陵西側先端部から北斜面を中心に踏査を行い、古墳17基、横穴墓４墓を確認した。３月16日開催の平成29年度第２回客員研究員共同検討会で報告した。

（平成30年度）

３月11、13日に北側斜面を中心に踏査を行ったが、遺跡は発見できなかった。３月４日開催の平成30年度第２回客員研究員共同検討会で報告した。横穴墓と古墳墳丘は別の通し番号を付けて整理すべき等の指導を受けた。

（平成31・令和元年度）

３月４日の開催の平成30年度第２回客員研究員共同検討会の指導のもと、分布図の作成等、整理作業を実施した。12月20日に令和元年度客員研究員共同検討会で報告した。

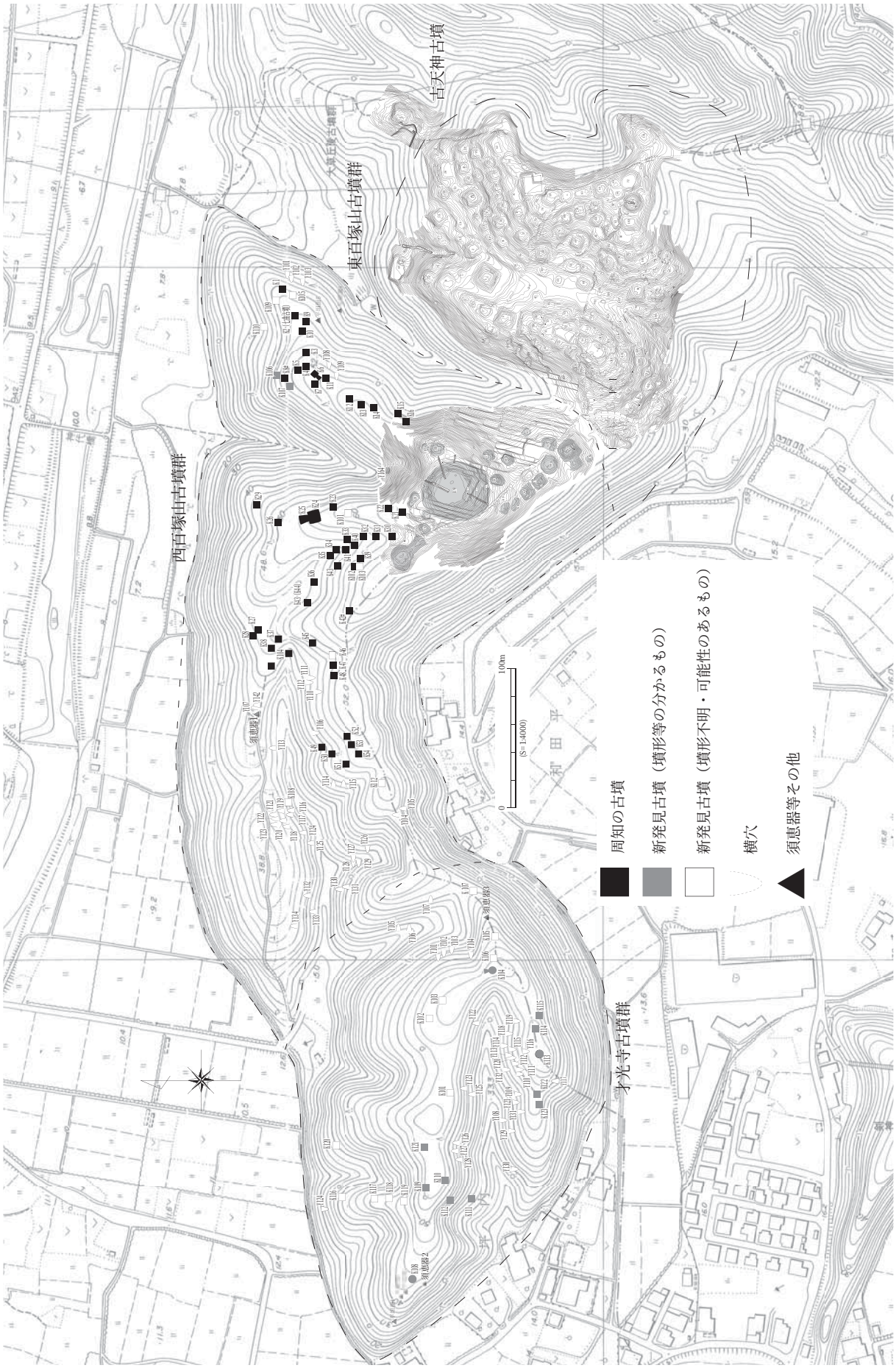
（２）各遺跡の概要

今回調査対象にした大草丘陵には、国指定史跡や県指定史跡が存在し、県内有数の古墳密集地である。遺跡としては東側から、湯田横穴墓群（東出雲町）、湯谷横穴墓群（東出雲町）、安部谷古墳群（横穴墓群を含む）、大草岩船古墳、古天神古墳、東百塚山古墳群、西百塚山古墳群（七曲古墳を含む）、才光寺横穴墓群、大円寺上古墳群（八雲町）、和田平横穴墓群（八雲町）が知られていた。

【湯田横穴墓群】　湯谷池のある谷の丘陵東側斜面に位置し、３基からなる（東出雲町1988）。安部谷横穴墓群を報告した出雲考古学研究会では、安部谷横穴墓群湯田支群として紹介している（出雲考古学研究会1989）。整正家形を呈する。

【湯谷横穴墓群】　湯谷池に面した横穴墓群で、1972（昭和47）年に中国電力鉄塔工事に伴い３基の発掘調査が実施されている（勝部1974）。時期は出雲４～６期と考えられる。

【安部谷古墳群】　国史跡安部谷古墳の丘陵上（西支群）及びその東側丘陵上（東支群）に存在する。西支群は方墳６基、円墳２基、前方後方墳１基



第３図　西百塚山古墳群・才光寺古墳群詳細遺跡分布図（S=1/4,000）

の計９基からなる。東支群には６基の古墳がある（山本1975、池淵2018）。

【安部谷横穴墓群（国史跡）】　国指定安部谷古墳（Ⅰ支群）を含む５支群11基からなる横穴墓群である。遺物としては出雲４～５期の須恵器、円筒埴輪、鉄製轡などが知られている（出雲考古学研究会1988・1989a・b・2007、山本1968）。

【大草岩船古墳（県史跡）】　全長25.2mの前方後方墳あるいは17.2mの方墳である。内部主体は露出した岩盤を使用した舟形石棺である(2)。埴輪が採集され、出雲２期の古墳である（大谷2002）。

【古天神古墳（県史跡）】　東百塚山古墳群の丘陵北側に位置する全長27mを測る前方後方墳である。全長約2.7mの横穴式石室（石棺式石室）を内部主体とする。鏡、大刀、鉄鏃、馬具、出雲３～４期の須恵器等がある（岩本編2018、原田2018）。

【東百塚山古墳群（県史跡）】　前方後方墳２基、円墳３基、方墳135基、横穴墓４基、弥生時代後期の四隅突出型墳丘墓１基からなる墳墓群で、一部が県指定史跡である。古墳時代前期末から後期にかけての古墳群である（大谷2012、岩橋2018）。

【西百塚山古墳群（県史跡）】　後述

【七曲古墳】　島根県立松江高校考古学部が1960（昭和35）年に発掘調査を実施した長辺13mの方墳である。15個体の円筒埴輪がＬ字形に並んで発見されている（松江高校考古学部1961）。西百塚山古墳群の北東丘陵に位置し、現在の西百塚山古墳群に含まれる。

【大円寺上古墳群】　径８～９ｍの円墳２基からなる（八雲村1978）。

【和田平横穴墓群】　３基が知られる横穴墓群で、詳細は不明である（八雲村1978）。

（３）分布調査の成果

尾根上に墳丘状の高まりや丘陵斜面に横穴墓の可能性がある窪地、丘陵西側先端付近からは郭状の平坦面を確認し、大草丘陵全域に遺跡が広がることが明らかとなった。そのため、松江市と協議し、遺跡名及び遺跡の範囲について、第３図のとおり整理した(3)。

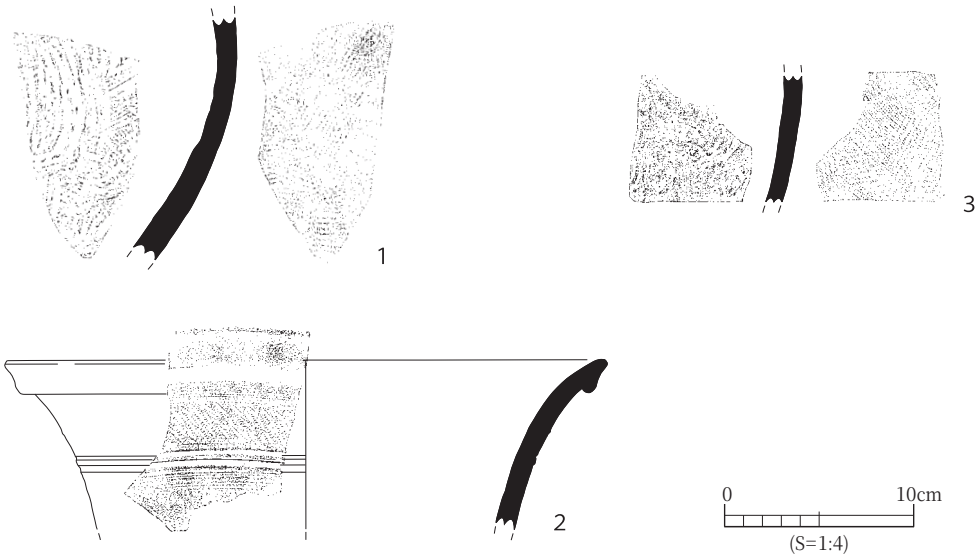
【西百塚山古墳群】　総数115基（方墳74基、円墳１基、前方後方墳３基、前方後円墳２基、横穴墓35基）以上を確認した(4)。分布調査では確認できない小型の古墳や埋没している横穴墓もあると考えられ、実数はさらに増加すると考えられる。ほとんどの古墳が方墳で、一辺６m前後から12m前後である。19号墳が存在する標高70.5mを最高所に尾根が４方向に伸びる。

北東に延びる尾根上には前方後方墳１基（６号墳）のほか、松江高校が調査した七曲古墳（２号墳）が存在する。丘陵先端に近い東向き斜面には横穴墓の可能性がある窪地（Y101～Y103）がある。南東尾根はなだらかで、東側には東百塚山古墳群がある。前方後方墳１基（67号墳）を含む古墳12基がある。

北西尾根には前方後円墳１基（20号墳）のほか、小型の前方後方墳の可能性がある古墳（24・25号墳）があるが、今回は方墳２基とした。尾根先端付近は墓地となり、古墳は確認できなかったが、須恵器が採集されている（第４図１）。西側尾根には前方後円墳１基（57号墳）がある。西側尾根と北西尾根の間は緩斜面となり、古墳が確認できる。北西尾根と西側尾根の間には北側から深い谷が入り込み、その深い谷から南側に向かって小谷が数筋入る。各斜面には、開口している横穴墓やその可能性のある窪地が確認できる。横穴墓が２～３基確認できる箇所や北西尾根が西側に向かって伸びる標高38.8m付近には10基程度が数段に分かれて存在する（Y116～Y125）。意宇平野側の斜面からは横穴墓は発見できなかった。

西側尾根を西側に向かうと標高52m付近（19号墳から約180m地点）にも古墳が存在し（K49～K54）、さらに西側には古墳（K112）が１基存在する。その南向き斜面には和田平横穴墓群３基と報告されていた横穴墓があり、今回はY104、Y105の２基が確認できた。

【才光寺古墳群】　西百塚山古墳群の西側に位置し、北側から谷が入る。総数54基（方墳20基、円墳２基、前方後円墳１基、横穴墓31基）以上あり、分



第４図　西百塚山古墳群・才光寺古墳群分布調査表採遺物実測図（S=1/4）

布調査では確認できない小型の古墳や埋没している横穴墓もあると考えられるので、実数はさらに増加するだろう。方墳は、一辺６m前後から12m前後である。円墳は約11m前後である。

前方後円墳（K104）、方墳（K106）等が存在する標高約56mの最高所から西側に向かって２つの尾根に分かれる。それらの尾根上には古墳が、２つの尾根の間には横穴墓やその可能性が考えられる窪地が存在する。前方後円墳（K104）は全長11m、後円部径８m、前方部幅5.4m、高さ2.5mである。北側尾根先端付近には径11m程度の円墳（K108）や平坦面があり、須恵器（第４図２）が採集されている。尾根中程には12～13m程度の方墳が存在する。

南側尾根には径12m程度の円墳（K113）と周囲に５～６m程度の方墳がある。東側尾根上から須恵器（第４図３）が採集されている。

【表採遺物】

第４図１～３は分布調査中に表採した須恵器である。１は須恵器提瓶である。外面は平行タタキののちカキメを施している。内面は当て具痕が明瞭に残る。部分的に当て具痕をナデ消す。出雲４新～５期にあたるものと考えられる(5)。２は須恵器甕口縁部である。復元径32㎝で２条の沈線に区画され、２段にわたり、クシ描き波状文が施されている。３は須恵器提瓶である。外面はタタキののちカキメを施している。内面は同心円当て具痕で、当て具痕をナデ消している。部分的に当て具痕が残る。

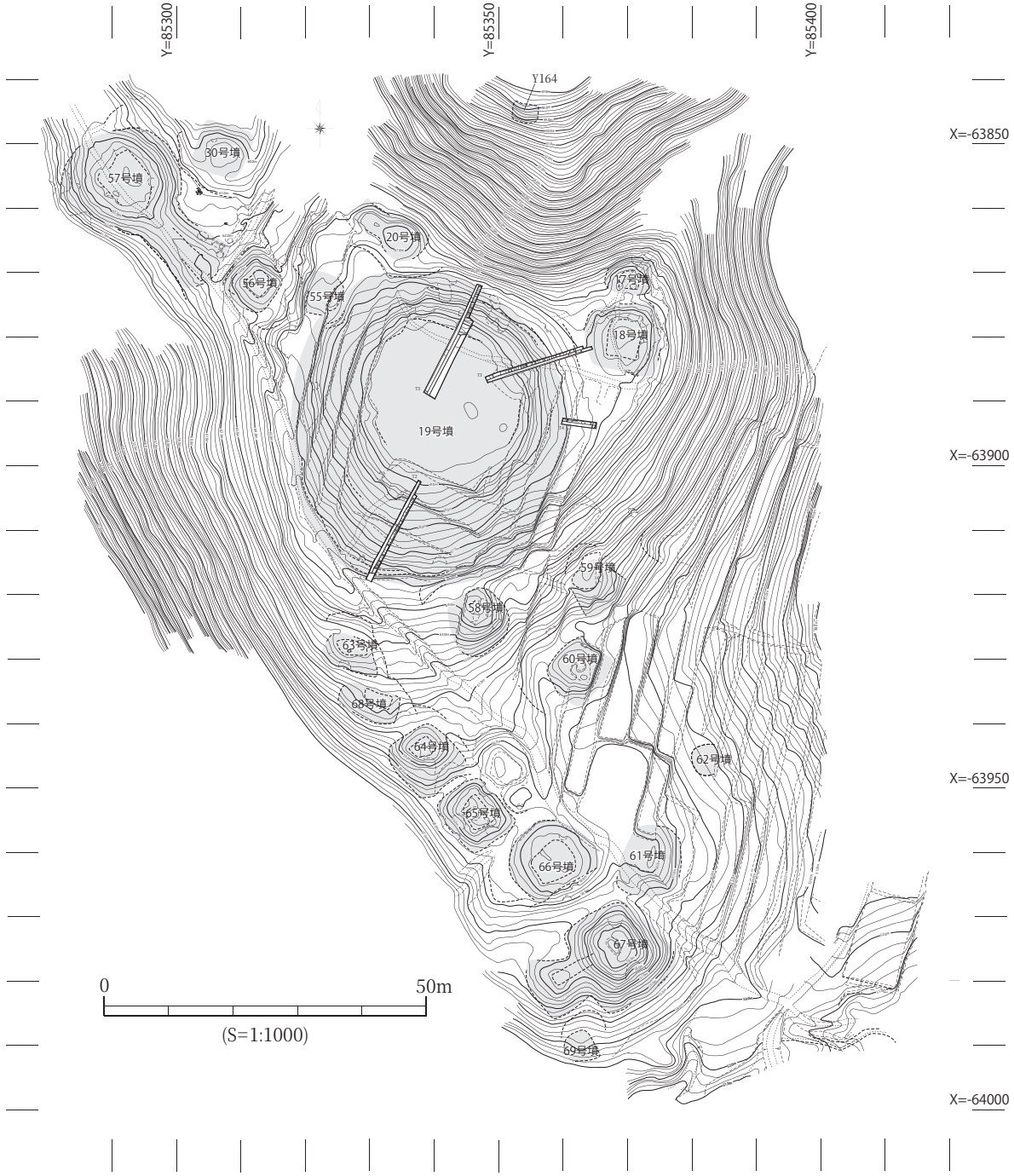
３．西百塚山19号墳の調査

（１）調査の目的・経過

発掘調査は、西百塚山古墳群最大の19号墳を調査対象として、築造時期や規模、墳丘構造などの確認を主な目的として調査を実施した。

平成30年度の調査は、５月10日～６月14日にかけて実施した。調査前の４月13日にトレンチ設定箇所などについて大谷晃二氏による調査指導を受け、トレンチ１とトレンチ２を設定した。調査中は、５月18日に大谷晃二氏、５月21日に岩本崇氏、５月22日に大橋泰夫氏による調査指導を受けた。また、５月26日に現地説明会を開催し、40名の参加者があった。３月４日開催の平成30年度第２回客員研究員共同検討会で調査成果について報告した。また、５月10日～30日にかけて、北側斜面、東側斜面、西側斜面を中心に周辺地形測量を実施した。北側斜面測量中に新たに横穴墓（Y164）を確認した。

令和元年度の調査は、５月８日～31日にかけて、調査を実施した。調査前の４月５日に岩本崇氏によ



第５図　西百塚山古墳群測量図（S=1/1,000）

る現地指導を受け、トレンチ３とトレンチ４を設定した。調査中の５月16日に岩本崇氏、大谷晃二氏、５月20日に大橋泰夫氏による調査指導を受けた。また、５月25日に現地説明会を開催し、50名の参加者があった。12月20日に令和元年度客員研究員共同検討会で報告した。

（２）発掘調査の成果

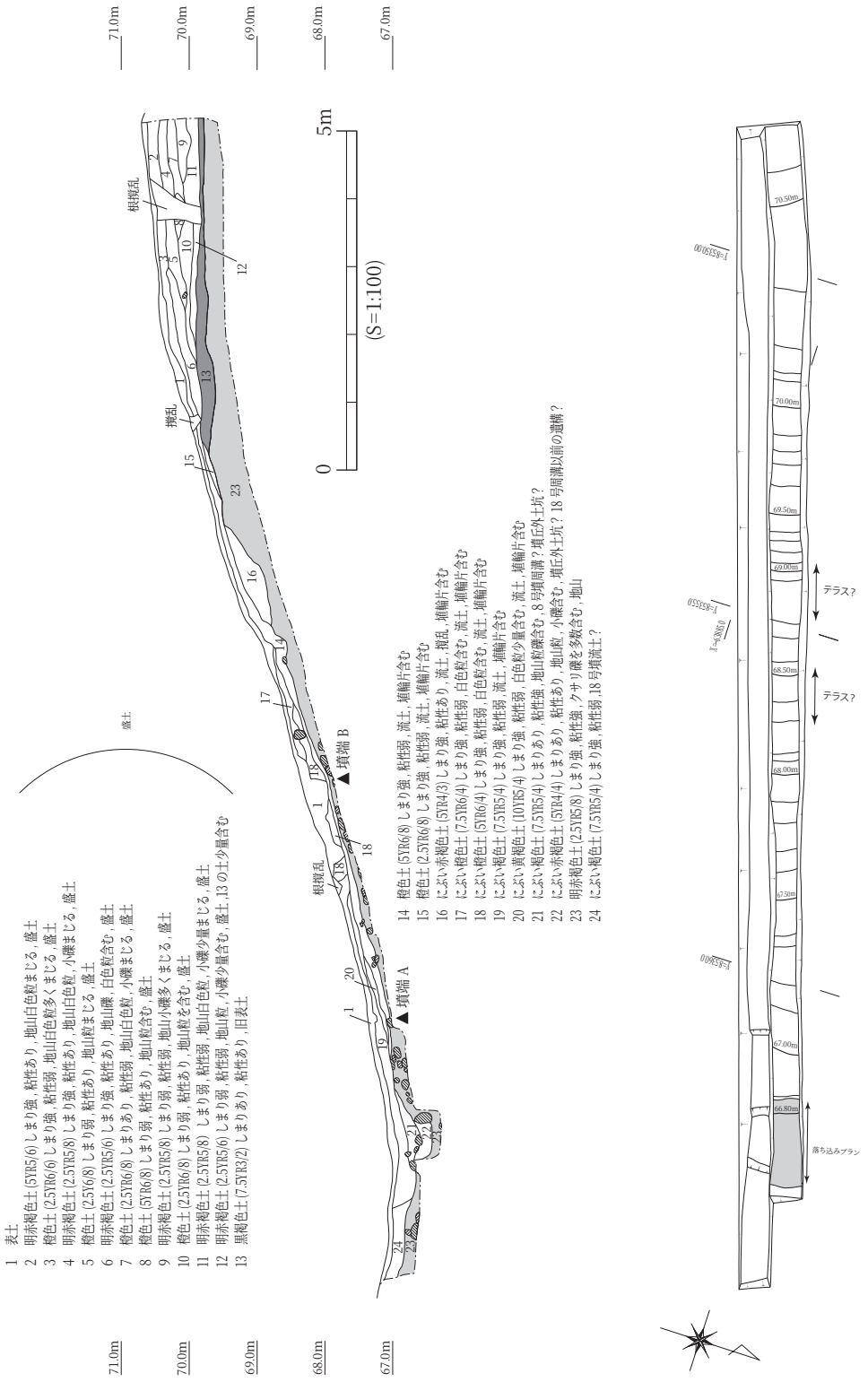
19号墳は、標高70.5mに位置し、古墳群で最高所に立地する。北西に20号墳、北東に17・18号墳、南に58・59・63号墳、西に55号墳が隣接する。20号墳と17・18号墳の間は、急斜面になっている。

松江北高校歴史愛好会の測量調査によると、二段築成の径約49mの円墳であり、付近に川原石が多数

第 6 図　西百塚山19号墳トレンチ配置図（S=1/400）

あることから葺石をもち、埴輪は元々なかった可能性が高いと指摘されている。測量調査の成果から20号墳は、19号墳を削って築造されていることが推定され、19号墳は20号墳に先行することが明らかになっている。また、20号墳で表採された須恵器坏身から20号墳の築造時期をTK47型式期に位置付けている。古墳の築造状況や表採された須恵器、出雲地域の大型円墳の外表施設などとの比較から19号墳を 4 世紀末～ 5 世紀初頃の築造と位置付ける（松江北高校歴史愛好会2017）。

これらの成果をもとに19号墳の築造時期や墳丘構造を解明するため、平成30年度と令和元年度に 4 つのトレンチを設けて、調査を実施した。

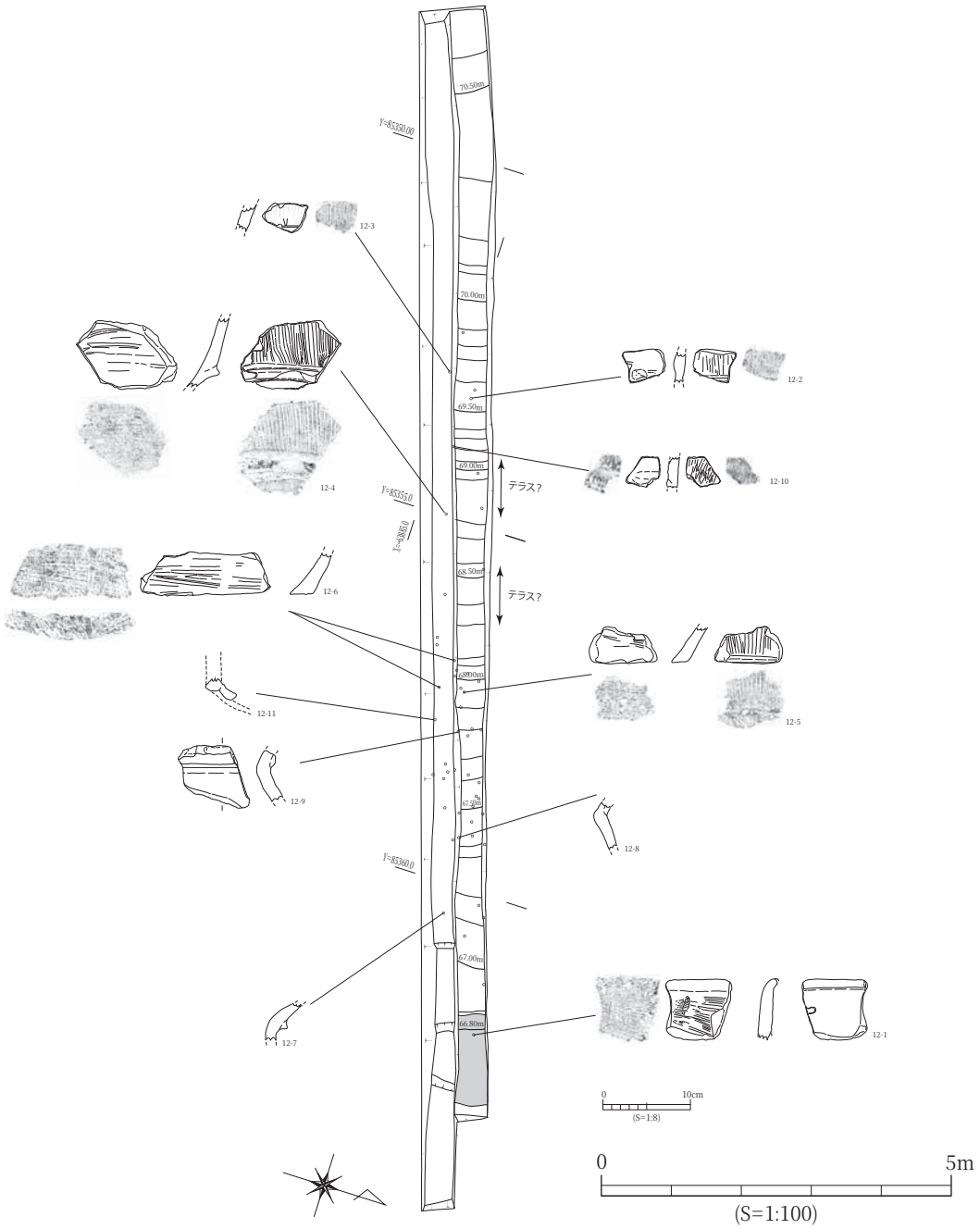


第７図　西百塚山19号墳トレンチ１（S=1/100）

【トレンチ１】

墳丘北東側に設定したトレンチである。測量調査の結果、最も残りがよいと考えられる箇所である。

墳丘断ち割り調査の結果、斜面部では表土下に埴輪片を含む盛土由来の流土層、地山層という層序を確認した。地山層は、地山の土色によく似た多量の



第 8 図　西百塚山19号墳トレンチ 1 埴輪出土分布図（S=1/100）

礫を含んでいる。当初、葺石の可能性を検討したが、地山に含まれる礫であると考えられる(6)。また、墳頂部では、旧表土と考えられる黒褐色土層（第 7 図第13層）を確認している。旧表土よりも上に堆積する土は盛土で、地山に由来するものである。盛土は最も厚い部分で0.72mの厚さがある。

これらのことから、19号墳の墳丘は地山を削り出して成形し、墳頂部のみに削り出した土を盛土として利用し、古墳を築造されていることが判明した。埴輪はすべて斜面部の流土から出土したことから、本来、墳頂もしくはテラスに樹立されていたものが転落したと考えられる。

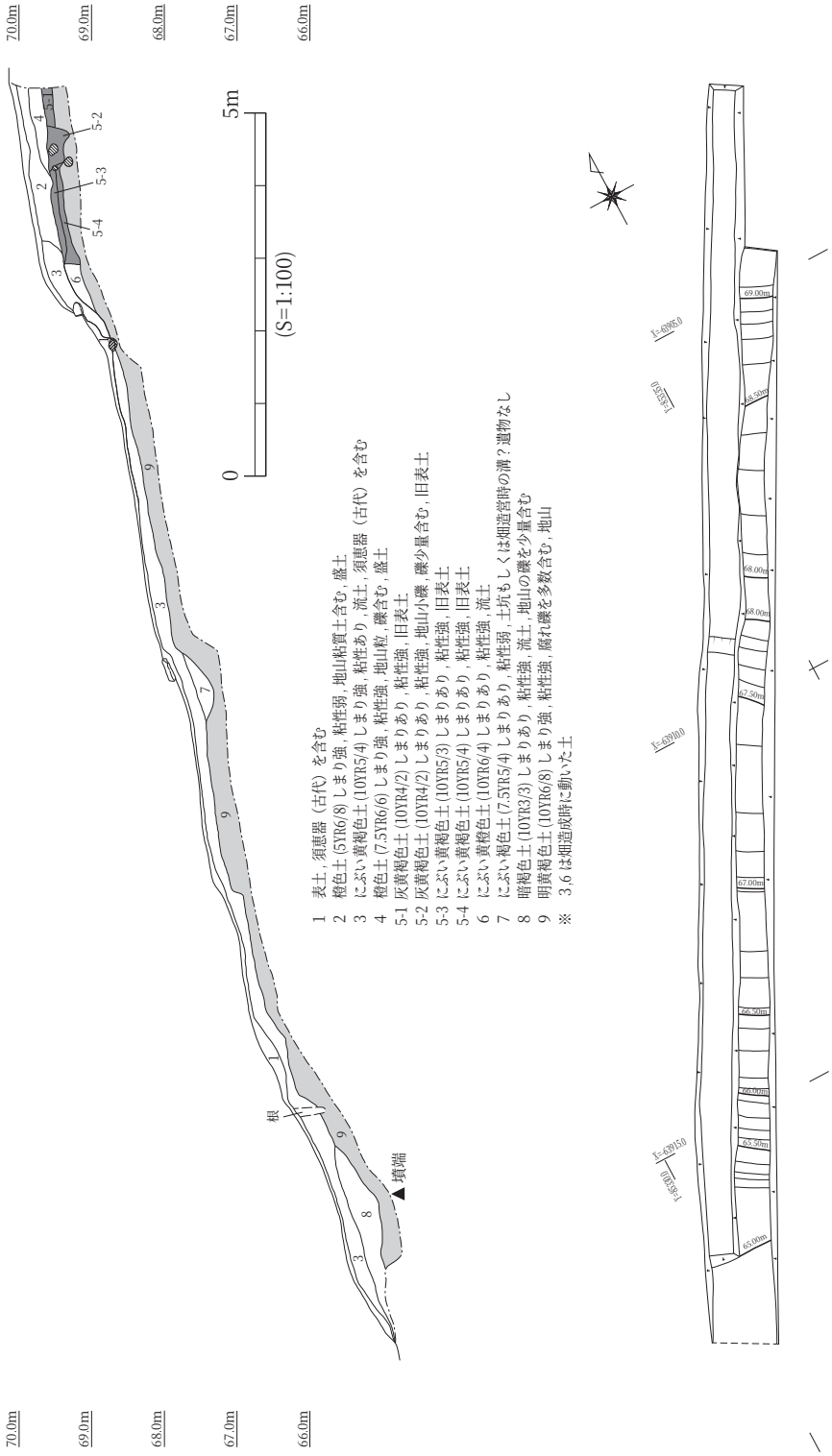
墳裾については、トレンチ 1 北端から3.8mで地山の傾斜が変化する点が確認された（墳端A）。この他に候補となるのはトレンチ 1 北端から7.4mのわずかではあるが地山の傾斜変化がみられる箇所で

ある（墳端B）。１つ目の案の場合、トレンチ１北端から8.6～９mがテラスになり、２つ目の案の場合、トレンチ１北端から9.8～10.6mの部分がテラスと考えられる。

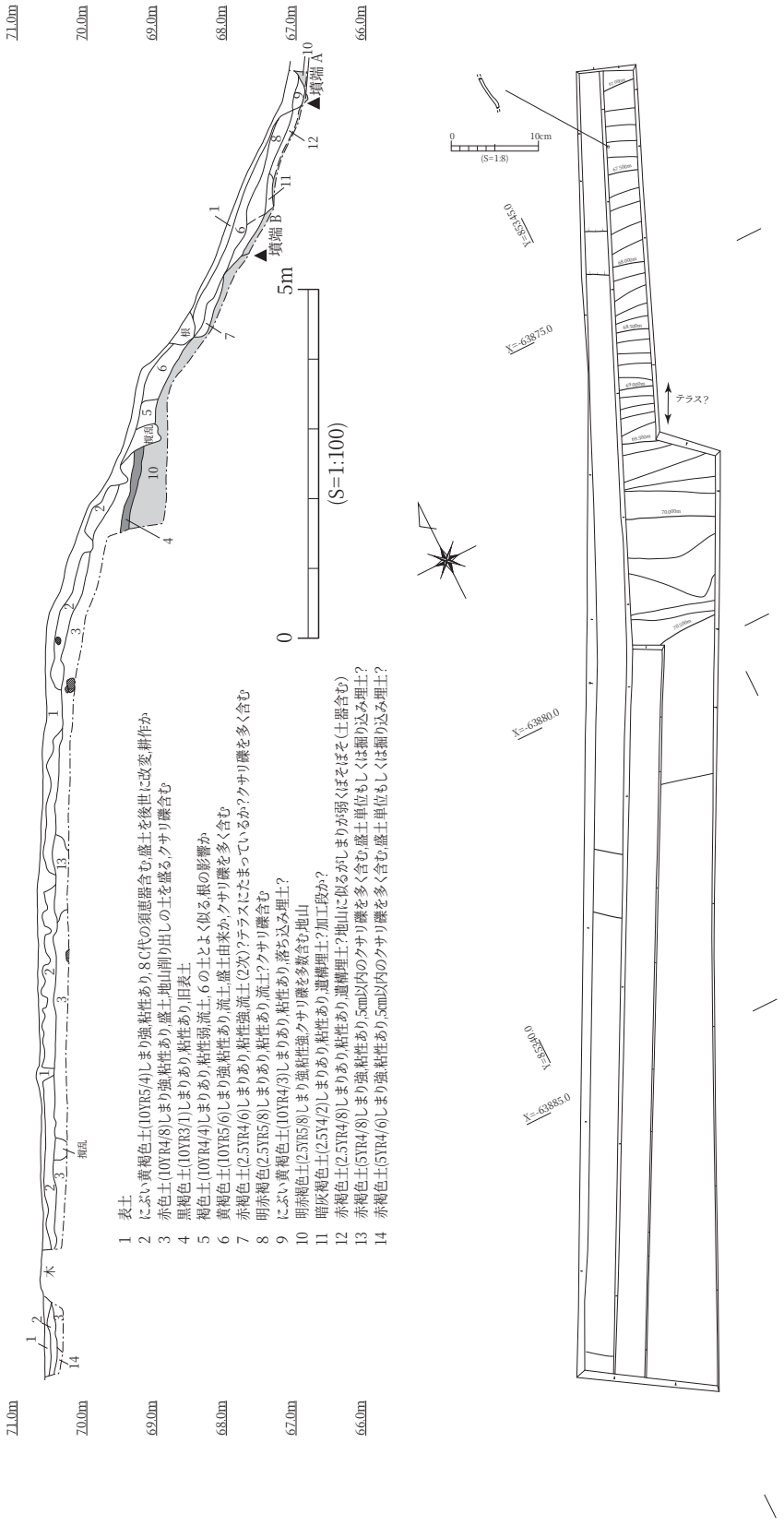
【トレンチ２】

墳丘南側に墳頂部から斜面にかけて設定したトレンチである。当該箇所は測量調査の結果、段々畑の改変を大きく受けているが、造成土下層で古墳築造当初の痕跡を確認できる可能性がある箇所として、調査を実施した。

墳丘断ち割りの結果、斜面部は段々畑造成時に大

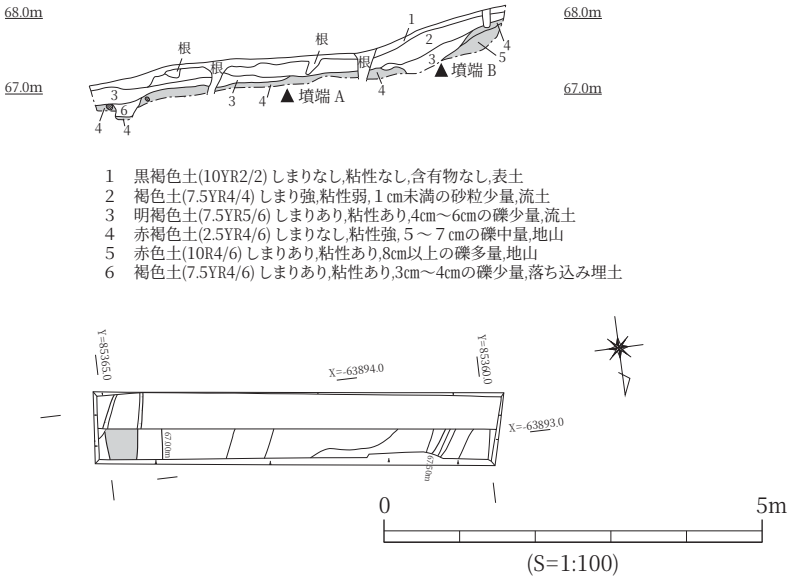


第９図　西百塚山19号墳トレンチ２（S=1/100）



第10図　西百塚山19号墳トレンチ３（S=1/100）

きく改変されていることが分かった。墳頂部では、トレンチ１と同様に旧表土（第９図第５層）と盛土の関係を確認している。旧表土の標高はトレンチ１に比べ、0.2m低い。また、盛土は0.3mの厚さしかなく、本来はさらに厚かったものと考えられる。埴輪などの古墳にかかわる遺物は出土しなかったもの



第11図　西百塚山19号墳トレンチ４実測図（S=1/100）

の、表土や流土から奈良時代の須恵器が出土しており、奈良時代の段階で何らかの利用があったものと推測される。

斜面部は畑の造成により古墳築造当時の痕跡を確認することができなかった。しかし、墳裾については、トレンチ２南端から２ｍで地山の立ち上がりを確認することができた。

【トレンチ３】

墳丘北側に墳頂部中央付近から斜面部にかけて設定したトレンチである。墳丘断ち割り調査の結果、トレンチ１、トレンチ２と同様に地山を削り出して墳丘を成形し、墳頂部には旧表土（第10図第４層）上に0.54～0.9m盛土をしていることを確認した。

墳頂部では、平面で部分的に土質の異なる箇所がみられたが、盛土単位の違いか埋葬施設のプランの一部かについては、幅の狭いトレンチであり、詳細は確認できなかった。

斜面部では、北側で断面の観察から加工段等の遺構の可能性のある堆積を確認している。19号墳築造以前の遺構の可能性があるが、詳細は不明である。葺石になる川原石などは確認されなかった。墳裾は、トレンチ１と同様に２案ある。１つ目はトレンチ３北端から0.6mの地山傾斜変換点である（墳端A）。２つ目はトレンチ３北端から2.7mの地山傾斜変換点である（墳端B）。この部分についてもわずかながら平坦な地山面が立ち上がる様子が確認できる。テラスは、トレンチ３北端から５ｍの箇所で地山面が平坦になっており、候補としてあげられる。

出土遺物は、墳頂部で古代の須恵器、加工段の可能性のある遺構付近から土師器が出土した。

【トレンチ４】

墳丘東側の斜面部から平坦部にかけて設定したトレンチである。当該箇所も測量調査の結果から段々畑の造成を受けているが、造成土の下層に古墳築造当時の痕跡が確認できる可能性のある箇所である。

墳丘断ち割りの結果、畑の造成により、大きく改変されていることが分かった。断面の観察から２カ所の墳裾の候補を確認した。１つ目がトレンチ４東端から2.6mで地山の傾斜がわずかに変化している部分である（墳端A）。２つ目が３層下、トレンチ４東端から4.6mにみられる地山の立ち上がりである（墳端B）。畑の造成のためどちらの墳裾案もわずかな痕跡によるものであり、明確な墳裾とはいえない。出土遺物はない。

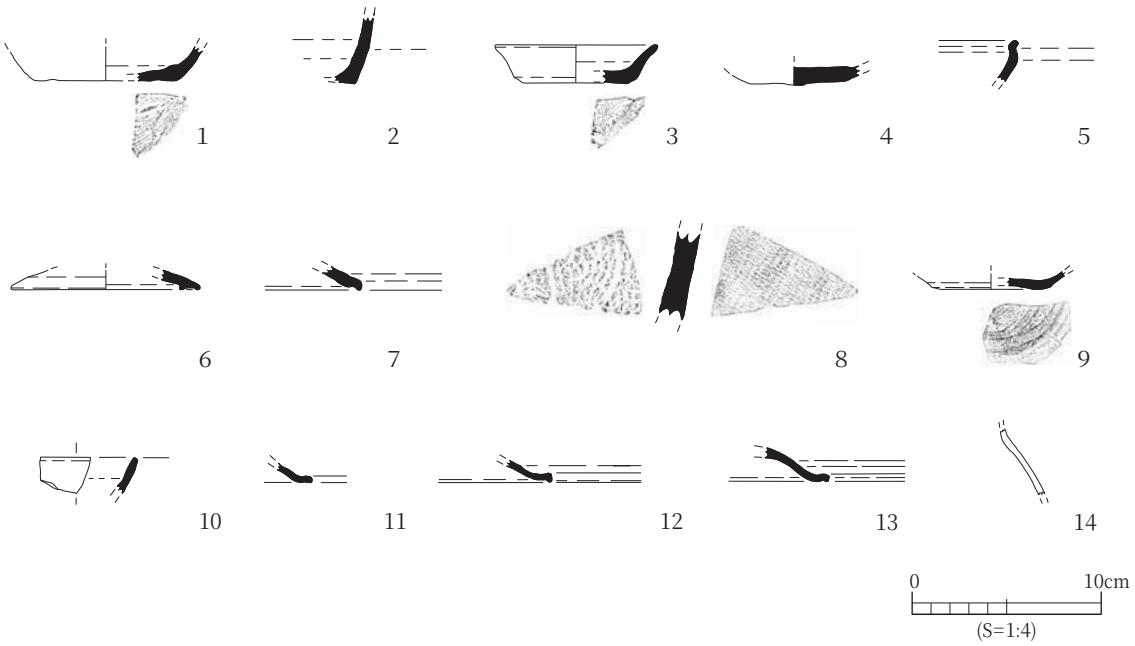
【出土遺物】

出土遺物は埴輪のほか、奈良時代の須恵器等が出土した。なお、埴輪はすべてトレンチ１からの出土

第12図　西百塚山19号墳出土遺物（1）（S=1/4）

である。

第12図１・２は円筒埴輪である。１は円筒埴輪の口縁部である。口縁部断面形は、L字状を呈している。外面はナデ、内面はヨコハケが施されている。２は円筒埴輪の突帯部付近の破片である。外面にタテハケが施され、内面は指頭圧痕がみられる。３～９は朝顔形埴輪である。３は外面には粗いタテハケが施される。内面の調整は不明である。外面には突帯部の痕跡を一部で確認することができる。４は朝顔形埴輪の一次口縁から二次口縁にかけての破片である。外面に粗いタテハケ、内面に粗いヨコハケが施される。外面には赤色顔料が塗布される。５は朝顔形埴輪の一次口縁付近もしくは頸部突帯付近の破片である。外面は粗いタテハケ、内面は粗いヨコハケが施され、外面には赤色顔料が塗布される。また、突帯部との接合面を観察することができる。６は朝顔形埴輪の一次口縁付近もしくは頸部突帯付近の破片である。外面は摩滅が激しく調整不明であるが、内面は粗いヨコハケが施され、外面には赤色顔料が塗布される。また、突帯部との接合面を観察することができる。７は朝顔形埴輪の頸部から肩部にかけての破片である。頸部突帯がみられる。内外面の調整は、摩滅が激しく不明である。８は朝顔形埴輪の頸部突帯から肩部にかけての破片である。内外面の



第13図　西百塚山19号墳出土遺物（2）（S=1/4）

調整は、摩滅が激しく不明である。9は朝顔形埴輪の頸部突帯から肩部にかけての破片である。内外面の調整は、摩滅が激しく不明である。10は形象埴輪もしくは朝顔形埴輪の可能性のある破片である。外面は粗い斜めのハケが施される。内面には接合箇所を指で押さえた痕跡と接合部に刻み目がみられる。胎土などは他の朝顔形埴輪と類似するが、破片が直線的であることやハケが斜めであること、ハケの先端が他のハケに向かって斜めに施されるなどの特徴がある。しかし、小片であり、器種や部位については確定できない。

形象埴輪の可能性のあるものとして、11がある。11は蓋形埴輪の軸受部下端突帯[7]と考えられる破片である。内面に笠部がはがれた痕跡がみられる。摩滅が激しく調整は不明である。

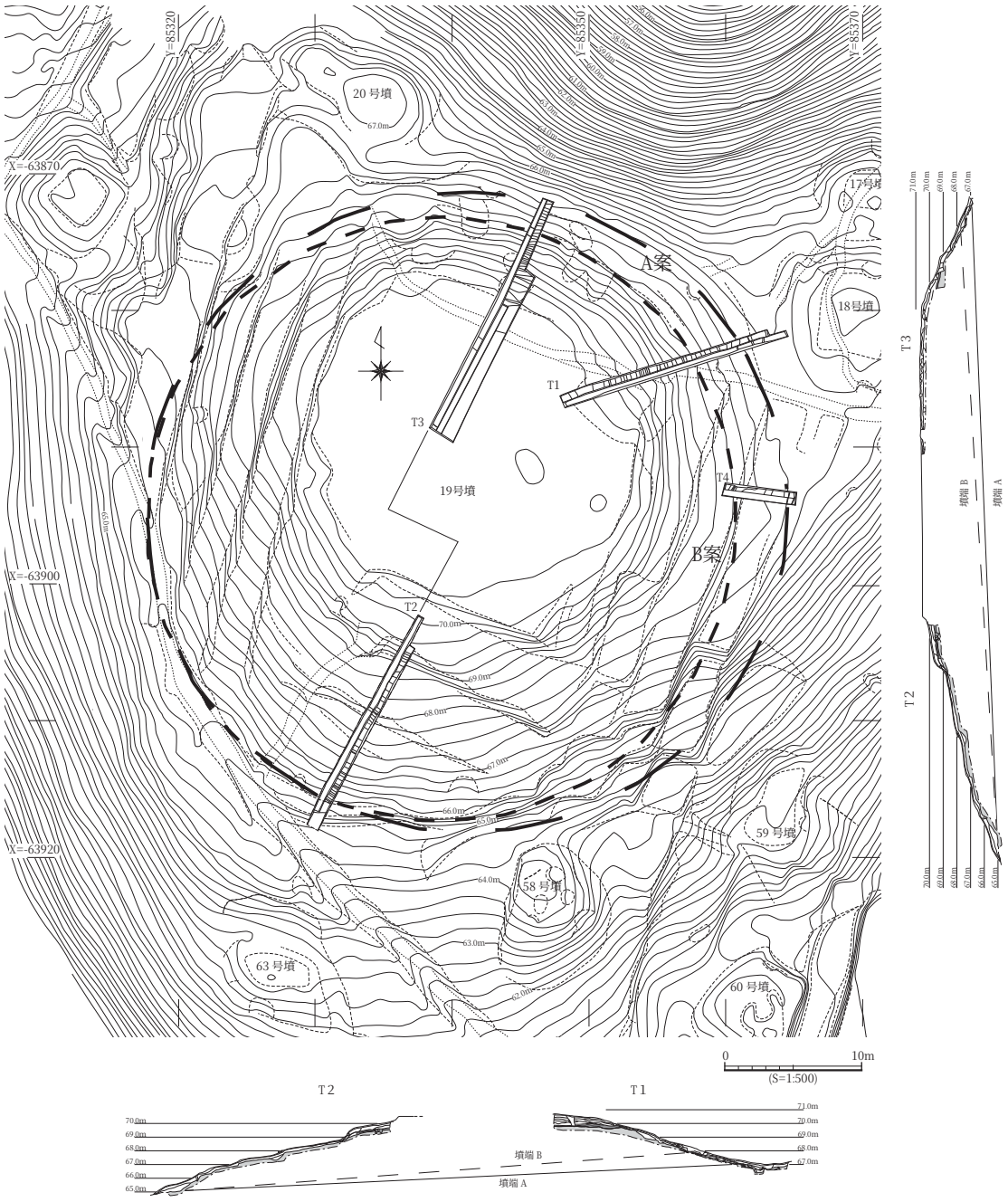
12は18号墳出土の円筒埴輪突帯部である。内外面ともに摩滅が激しく調整は不明である。

須恵器はトレンチ2（第13図1～7）、トレンチ3（第13図9～13）で出土した。ほとんどが小片で、いずれも表土直下で出土した。1～5、9、10は坏、もしくは皿である。1、3[8]、9は底部回転糸切り、4はヘラ切りである。5、10は口縁部で、5は口縁端部がくの字状に屈曲する。6、7、11～13は坏蓋である。6のみ内面にかえりがつく。いずれの須恵器も古代のものであり、古墳の築造時期を示すものではない。須恵器坏蓋や無高台坏の特徴からおおよそ7世紀後半～8世紀第4四半期（出雲国府跡第1～第4型式）の中で捉えることができる（島根県教委会2013）。8の甕片は、平成30年度調査中に19号墳南東斜面で表採した。外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕がみられる。

14はトレンチ3で出土した土師器である。小片であり、摩滅により調整が不明である。甕の頸部の可能性がある。

4．小　　結

以上の4カ所のトレンチ調査の成果から、西百塚山19号墳の墳丘は、地山を削り出し、墳丘を成形した後に削り出した土を墳頂部に盛土として利用し、構築した2段築成の円墳である。葺石になりうる川原石等がトレンチ内から検出されなかったことから、もともと葺石をもたない構造であったことが判明した。トレンチ調査によって盛土由来の流土中から断片的ではあるが、埴輪が出土した。流土中からの出土であり、原位置を保つものはないが、想定されるテラス付近やそれよりも低い位置から出土していることから、本来は墳頂部、もしくはテラスに樹立されていた可能性が考えられる。しかし、後世の改変



第14図　西百塚山19号墳墳丘復元図（S=1/400）

が著しい点は注意が必要である。ただし、埴輪が出土したのはトレンチ1のみで、もともと局所的に埴輪が樹立されていたものと考えられる。

（1）墳丘規模

墳丘規模については、2カ年の調査において、明確な墳裾をいずれのトレンチからも確認することが出来なかった。それぞれのトレンチにおいて、墳裾案とする箇所がいくつかある状況であり、ここに墳丘規模について2案（A・B案）示したい。

A案は、各トレンチの最も標高が低い箇所で確認した墳裾案をつないだものである。この案では、墳丘規模は径約46mとなる。

次にB案は、トレンチ1、3、4のA案よりも標高の高い位置で確認した墳裾案とトレンチ2の墳裾をつないだものである。この案では、墳丘規模は径

約44mとなる。

以上、2案を示したが、どちらの案についても根拠に乏しい部分を含んでおり課題が残る。限られた情報の中ではあるが、墳丘規模は、B案の径約44mを最小規模とし、測量調査の成果である径約49mの中におさまるものと考えられる。また、テラスについてはトレンチ1、3で可能性のある箇所を確認しているが、情報量が少なく、現状での復元は難しい。今後の課題としたい。

（2）築造時期

次に西百塚山19号墳の築造時期についてである。時期決定の指標となる遺物は、トレンチ1から出土した埴輪のみである。これらの埴輪は、突帯や基部の破片がなく、口縁部の破片も1点のみである。また摩滅が激しく、外面調整が分かる資料もわずかである。円筒埴輪の胴部で外面調整が分かるものは、1点のみであるが、タテハケを施している。いずれの埴輪もヨコハケを残す個体はないものの黒斑がなく、焼きが均質である点が大きな特徴といえ、窖窯焼成導入後の埴輪の可能性がある。これらの特徴から西百塚山19号墳出土の埴輪は、大きくみれば第Ⅳ期以降に位置付けられるものと考えられる（川西1978）。

次に出雲地域の円筒埴輪の中で西百塚山19号墳出土の埴輪を位置付けてみたい。藤永照隆氏の編年・型式分類の中に位置付けることは、底部や突帯、透かしなどの形態の特徴を示す資料がないため、困難である（藤永1997）。その中で円筒埴輪口縁部は外方に屈曲する藤永分類Bにあたる。椿真治氏が行った埴輪の整理によると藤永分類Bの口縁は、藤永分類3類まで存在し、4類以降は確認できないとする（椿2008）。これによれば、椿氏の方墳第2期に位置付けられることになる。さらに、方墳第2期は川西編年に置き換えると、川西Ⅳ期前半にあたるものと理解できよう。

また、西百塚山19号墳の北西に位置する西百塚山20号墳からは、TK47型式期に位置付けられる須恵器坏身が表採されている（松江北高校歴史愛好会2017）。20号墳は小型の前方後円墳で測量調査の成果から19号墳の裾を一部削って築造していることが分かる。このような墳丘の切り合い関係から西百塚山19号墳はTK47型式期以前の築造である。

これらのことを総合すると出土した埴輪と古墳の切り合い関係からの限られた情報ではあるが、19号墳の築造年代は5世紀前半（TK73～TK216）頃の可能性がある。

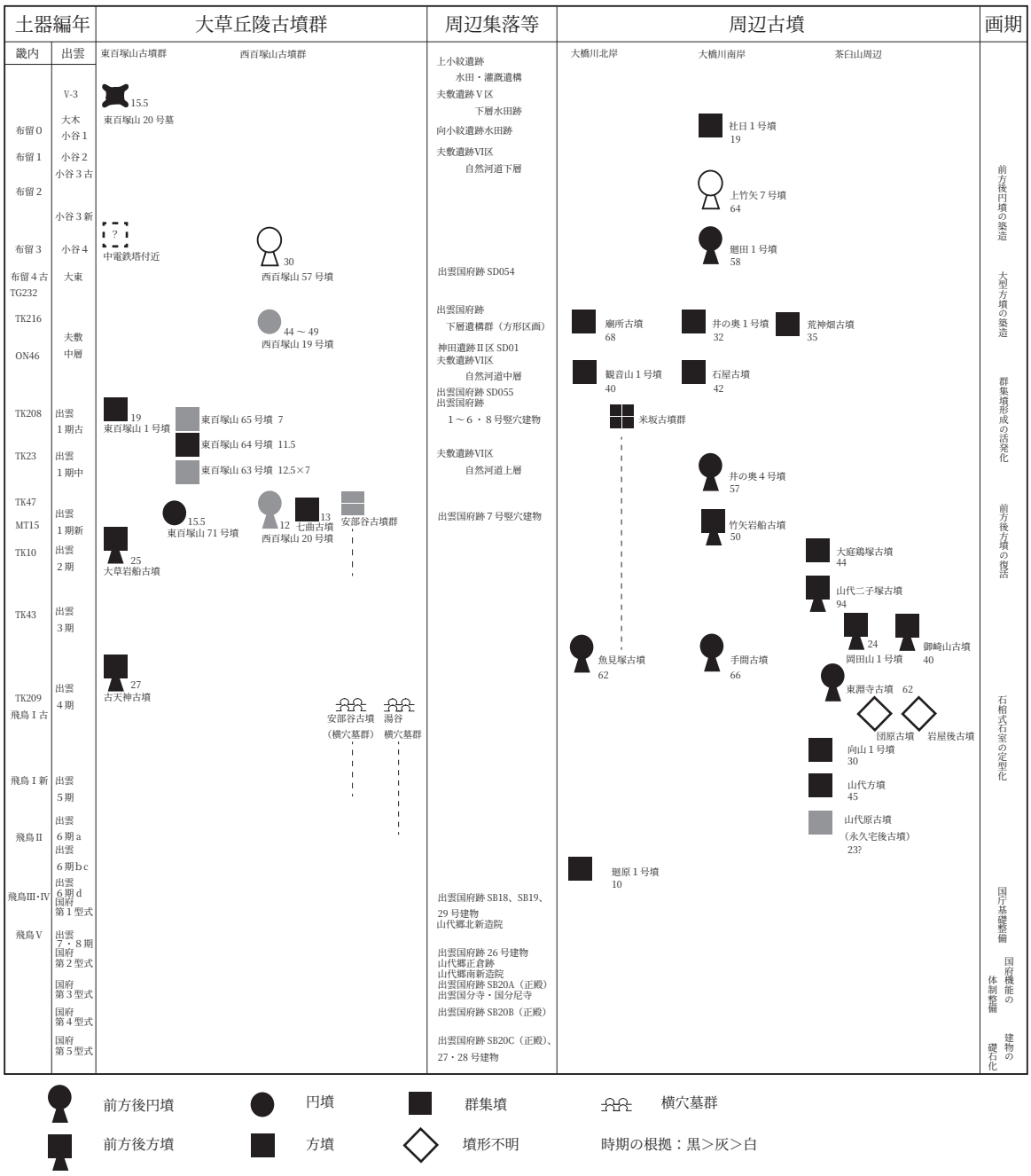
（3）西百塚山19号墳の位置づけ

今回の調査により、西百塚山19号墳は、5世紀前半に築造された径約44～49mの円墳と判明した。

この規模は、大草丘陵古墳群中では最大で、出雲地域の円墳の中でも最大級の規模である。ここでは、西百塚山19号墳について、大草丘陵古墳群、また出雲地域における位置について整理してみたい。

先述のように大草丘陵古墳群は東百塚山古墳群や西百塚山古墳群、古天神古墳、大草岩船古墳、安部谷横穴墓群などを総称した名称である。大草丘陵古墳群では、現在確認されている中では、東百塚山20号墓が四隅突出型墳丘墓で弥生時代後期の築造で最も古いものである。古墳時代前期に遡るものは少ないが、東百塚山古墳群では中国電力鉄塔付近で土師器二重口縁壺の口縁部が採集されている。この資料は奥才13号墳（松江市鹿島町）出土土師器壺と酷似しており、古墳時代前期のものと考えられる（大谷1996）。付近にこの時期の古墳があるものと考えられる。また、近年、松江北高校歴史愛好会によって、西百塚山57号墳の測量調査が実施され、西百塚山19号墳の北西に位置する全長30mの前方後円墳と確認されている（松江北高校歴史愛好会2019）。前方部幅、くびれ部幅が狭いこと、後円部が前方部に比べて高いなどの特徴から古墳時代前期後半の築造と想定される。

このように東百塚山古墳群や西百塚山古墳群の造墓活動は古墳時代前期に開始されたと考えられるが、その活動が最も活発になるのは、東百塚山1号墳後の5世紀後葉から6世紀前半である（大谷2012）。その中で西百塚山19号墳は5世紀前半に築造されて



第15図　大草丘陵古墳群と周辺の古墳編年案

おり、最も造墓活動が活発化する時期に先行する。また、大草丘陵古墳群の多くの古墳が一辺10m前後の方墳である中で、径約44～49mの円墳であることは注目される。これまで大草丘陵の首長墳については、東百塚山１号墳（５世紀後半）→大草岩船古墳（６世紀前半）→古天神古墳（６世紀後半）と想定されてきた（大谷1998）。今回の調査で新たに西百塚山19号墳が５世紀前半の築造であると判明したことから大草丘陵の首長墳は、西百塚山19号墳（５世紀前半）→東百塚山１号墳（５世紀後半）→大草岩船古墳（６世紀前半）→古天神古墳（６世紀後半）へと推移していくものと想定される。ただし、大草丘陵の首長墳の築造には「方丘」が意識されており、その中で19号墳が円墳であることは注意を要する。いずれにしても、西百塚山古墳群内の最高所に位置し、東百塚山古墳群、西百塚山古墳群の造墓の最盛期に先行することから、大草丘陵古墳群の形成を考える上で重要な古墳であると考えられる。

西百塚山19号墳は径約44～49mの円墳である。出雲地域の大型円墳について検討した原田律夫氏によると、出雲地域の大型円墳（径24m以上と定義）は古墳時代中期を中心とした時期であるとした（原田1980）。原田氏によると、これらの大型円墳は中期の大型前方後円墳に近接して所在するものがあることや、大型前方後円墳の集中する地域ではみられず、前方後円墳の比較的少ない地域で多くみられると指摘している。その後、本庄考古学研究室も径24m以上を大型円墳と定義し、出雲地域の大型円墳31基が集成されている（本庄考古学研究室2004・2005・2006）。日本海沿岸の古墳時代中期の大型円墳について検討した杉原和雄氏は、径50m以上を大型円墳と定義する（杉原2010）。出雲地域では大垣大塚１号墳を取り上げている。出雲と因伯は丘陵上に立地し、特に出雲地域では前期古墳の乏しい地域に中期の大型円墳が大首長墓となり、その後前方後方墳や方墳に譲る地域と指摘する。

先学の指摘からは西百塚山19号墳は出雲地域内では大型円墳と位置づけることができる。また丘陵上に立地し、次代の首長墳は一辺19mの方墳である東百塚山１号墳で、その後も前方後方墳である大草岩船古墳、古天神古墳へと推移し、杉原氏の指摘も追認することができる。

一方で西百塚山19号墳が築造された古墳時代中期中葉から出雲地域では、大橋川沿岸を中心に大型方墳の築造が開始され、首長墳の築造に際して大きな画期とする指摘がある（岩本2015）。また、岩本氏はこれらの大型方墳の築造開始と西百塚山19号墳のような大型円墳との関係や出雲国府跡下層の首長居館との関係など、出雲東部の古墳時代中期社会動向をどのように整理するか課題とする（岩本2020）。

出雲国府跡下層遺構群（大舎原地区）について、角田徳幸氏、池淵俊一氏の指摘がある（角田2008、池淵2013）。角田氏は、板状柱根の建物について、祭殿状施設の可能性を指摘している（角田2008）。池淵氏は角田氏の成果を用い、出雲国府跡大舎原地区で検出された溝について、南北77m、東西62mの方形区画に復元している。時期についても出土した土器から中期中葉～後葉に位置付けている（池淵2013）。岩本氏の指摘するようにこれらの遺構群と西百塚山19号墳は立地と時期の近さから無関係とは考え難いが、出雲国府跡下層遺構群では渡来系遺物が多数出土している一方、西百塚山19号墳ではそのような要素を現状認めることができない。しかし、意宇平野の集落の様相を整理すると東百塚山・西百塚山古墳群の首長墳の動向が集落の様相と一致することが分かる。意宇平野の開発を主導した首長層は大橋川南岸の大型古墳の被葬者層とする評価（池淵2013）があるが、意宇平野を眼下に見下ろす位置に築造された西百塚山19号墳との関係は無視できない。

この時期の大橋川沿岸に築造される大型古墳が方墳である一方、西百塚山19号墳は円墳である点は、出雲地域の古墳時代中期を検討するうえで注目すべきことであろう。現状、西百塚山19号墳の築造時期は大型方墳の築造のピークに重なっているものと想定される。これらの大型方墳については、大王や王権との直属的な性格を有した被葬者を表徴した墳形であった可能性（仁木2015）が指摘されている。同時期における墳形の違いから、被葬者の性格の違いや階層性などが想定される。ただし、西百塚山19号墳では埴輪が出土しているものの出土量の少なさや小片であることから、廟所古墳などの大型方墳との先後関係(9)が不明瞭な部分もあることは注意が必要である。

以上、断片的な限られた情報ではあるものの、西百塚山19号墳の調査から得られた情報は、出雲地域の古墳時代中期社会を考えるうえで大変重要なものといえる。

おわりに

以上、大草丘陵の分布調査と西百塚山19号墳の調査成果について報告した。西百塚山19号墳の時期や位置づけなどについて検討したが、断片的な情報が多く、課題が残る。最後に大草丘陵古墳群と西百塚山19号墳に残る課題について示しておきたい。

大草丘陵古墳群は、東百塚山古墳群や西百塚山古墳群、安部谷古墳群、才光寺古墳群など、大草丘陵

に所在する古墳群の総称である。大草丘陵に墓域を持つことから、各古墳群は何かしらの関係性があり、また、大きな意味では各古墳群は支群であるといえる。各古墳群内にもいくつかの小さな支群があり、これらの具体的な整理は行われておらず、今後の課題となろう。

西百塚山19号墳については、発掘調査により墳丘構造などの面では一定の成果がみられた。しかし、築造時期については、断片的な埴輪から想定するにとどまっており、明確な築造時期はいまだ検討が必要である。また、岩本氏も指摘するように西百塚山19号墳と大橋川沿岸に築造される大型方墳や出雲国府跡下層遺構群との関係性など、現状の情報では整合的な整理を行うことは難しいが、出雲地域の古墳時代中期社会を考えるうえで大変重要である。

以上、様々な課題があるが、今後の課題として示しておきたい。

付　記

本報告に使用した西百塚山古墳群の測量図は松江北高等学校歴史愛好会の実施した測量調査の成果を用いており、作成者の許可を得ている。また、本報告に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（島根県松江市打出町33番地）で保管している。

本論の構成のうち、第２章を守岡正司、その他を吉松優希が執筆し、編集は吉松が行った。

【註】

（１）曳野律夫氏のご教示による。

（２）春日岩船古墳とも呼ばれている（東出雲町1988）。

（３）遺跡名や範囲を変更したことにより、松江市八雲町の大円寺古墳群は東百塚山古墳群、松江市八雲町和田平横穴墓群は西百塚山古墳群となる。

（４）調査指導により、古墳と横穴墓は別番号を振り、頭にK：古墳、Y：横穴墓を付けた。本庄考古学研究室や大谷氏により古墳に番号が既に振られているものはその番号を2桁までで振り、今回の分布調査で確認した古墳等には新たに３桁の番号を振った。なお、番号はすべて仮称である。

（５）岩本真実氏のご教示による。

（６）渡邉正巳氏のご教示による。渡邉氏によるとこれらの礫はいわゆるクサリ礫であり、調査地の地質図を確認すると大森層の礫層（０c）に対応するとのことである。

（７）和田一之輔氏のご教示による。

（８）奈良文化財研究所分類須恵器皿Eにあたる（奈文研2005）。

（９）宍道湖北岸（古曽志）では、方墳である丹花庵古墳に大垣大塚1号墳や造出付円墳の古曽志大塚１号墳が先行して築造される、大型方墳築造以前に大型円墳が築造される事例がある。同様の動きを想定することが可能であれば、西百塚山19号墳は大橋川沿岸地域に築造される大型方墳に先行する可能性も想定できる。

【引用・参考文献】

池淵俊一2013「出雲国府跡における古代以前の遺構について」『出雲国府跡－９　総括編－』島根県教育委員会

池淵俊一2015「意宇平野の開発史」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター

池淵俊一2018「安部谷古墳群の測量調査」『上竹矢７号墳・東百塚山古墳群・古天神古墳・安部谷古墳群調査報告書』島根県教育委員会

出雲考古学研究会1988「松江・安部谷横穴墓群（上）」『八雲立つ風土記の丘館報』90

出雲考古学研究会1989a「松江・安部谷横穴墓群（中）」『八雲立つ風土記の丘館報』94

出雲考古学研究会1989b「松江・安部谷横穴墓群（下）」『八雲立つ風土記の丘館報』95

出雲考古学研究会2007「安部谷横穴墓群」『古代の出雲を考える９　遺跡と地域と考古学』

岩橋孝典2018「東百塚山古墳群の発掘調査」『上竹矢７号墳・東百塚山古墳群・古天神古墳・安部谷古墳群調査報告書』島根県教育委員会

岩本　崇2015「山陰における古墳時代中期首長墓の展開と「地域圏」の形成―古墳時代中期の地域社会と集団関係―」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター

岩本　崇（編）2018『古天神古墳の研究』島根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会

岩本　崇2020「島根県の動向～2019年度の古墳・横穴墓の調査～」『中四研だより』45 中国四国前方後円墳研究会

梅原末治1918「出雲に於ける特殊古墳（上）」『考古学雑誌』9-3　考古学会

大谷晃二1994「出雲地域の須恵器の編年と地域性」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会

大谷晃二1996「東百塚山古墳群の採集遺物」『八雲立つ風土記の丘館報』137

大谷晃二1996「付編　東百塚山古墳群の測量調査」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書』11島根県教育委員会

大谷晃二1998「付編　東百塚山1号墳の発掘調査」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書』12島根県教育委員会
大谷晃二2000「東百塚山古墳群測量調査中間報告２」『八雲立つ風土記の丘館報』162
大谷晃二2002「大草岩船古墳の測量調査」『八雲立つ風土記の丘館報』169
大谷晃二2007「東百塚山・荒神谷後谷・楮畑古墳の測量調査」『八雲立つ風土記の丘館報』188
大谷晃二2012「東・西百塚山古墳群」『松江市史』史料編２　考古資料 松江市
角田徳幸2008「出雲国府跡下層の古墳時代集落」『島根考古学会誌』第25集 島根考古学会
勝部　昭1974「松江・湯谷横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅴ集　島根県教育委員会
川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2日本考古学会
後藤藏四郎1925「古天神の古墳」『島根懸史蹟名勝天然記念物調査報告』第２回　島根懸内務部学部課
後藤藏四郎1933「安部谷の古墳」『島根懸史蹟名勝天然紀念物調査報告』第５輯　島根懸内務部学部課
島根県教育委員会1983「付載　古天神古墳測量調査」『風土記の丘地内発掘調査』Ⅱ
島根県教育委員会2013『史跡出雲国府跡－９総括編－』
杉原和雄2010「丹波・私市円山古墳と但馬・茶すり山古墳―日本海沿岸における古墳時代中期の大型円墳をめぐって―」『京都府埋蔵文化財論集』第６集
高橋健自1919「出雲國八束郡大草古天神古墳發掘遺物」『考古学雑誌』9-5　考古学会
田中大2015「出雲地域における中期円筒埴輪の時間的位置づけ」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター
椿　真治2008「出雲東部地域における埴輪出土古墳・中期後半を中心として」『古代文化』59-4財團法人古代學協會
奈良文化財研究所2005『平城宮発掘調査報告ⅩⅥ』兵部省地区の調査
仁木　聡2015「巨大方墳の被葬者像」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター
野津左馬之助1924「島根懸内存在古墳郡別一覧」『島根懸史』第４巻
原田敏照2018「古天神古墳の発掘調査」『上竹矢７号墳・東百塚山古墳群・古天神古墳・安部谷古墳群調査報告書』島根県教育委員会
原田律夫1980「出雲の大型円墳について」『季刊文化財』38島根県文化財愛護協会
東出雲町教育委員会1988『東出雲町の遺跡』
藤永照隆1997「出雲の円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会
本庄考古学研究室2004「出雲の主要古墳一覧（改訂版）」『島根考古学会誌』第20・21集 合併号 島根考古学会
本庄考古学研究室2005「出雲の主要古墳一覧（補遺Ⅰ）」『島根考古学会誌』第22集　島根考古学会
本庄考古学研究室2006「出雲の主要古墳一覧（補遺Ⅱ）」『島根考古学会誌』第23集　島根考古学会
松江北高校歴史愛好会2017「西百塚山19号墳―意宇平野に生きた豪族の証―」『季刊文化財』139島根県文化財愛護協会
松江北高校歴史愛好会2019「西百塚山57号墳は前方後円墳か？」『八雲立つ風土記の丘館報』226
松江高校考古学部1961「大草古墳発掘」『松江高校生徒会誌』第７号 島根県立松江高等学校
八雲村教育委員会1978『八雲村の遺跡』
山本　清1968「安部谷古墳」『島根県文化財調査報告』第５集　島根県教育委員会
山本　清1975「古墳」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会

第１表　分布調査時の表面採集資料遺物観察表

挿図番号	写真図版	取上番号	種別	器種	採集遺跡	採集箇所	法量（ ）内復元値(cm)			胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	備考
							口径	器高	底径					
4-1	19		須恵器	提瓶	西百塚山古墳群	須恵器1	－	－	－	密（1㎜以下の石英、長石等を含む）	良好	外面：灰色5Y5/1 内面：灰白色2.5Y7/1	外面：タタキのちカキメ 内面：同心円当て具痕、部分的にナデ	
4-2	19		須恵器	甕	才光寺古墳群	須恵器2	(32.0)	－	－	密（1㎜以下の砂粒を含む）	良好	外面：灰色5Y5/1 内面：灰色5Y5/1	外面：波状文、沈線(2条)、ナデ 内面：ナデ	
4-3	19		須恵器	提瓶	才光寺古墳群	須恵器3	－	－	－	密（1㎜以下の砂粒を含む）	良好	外面：灰色N5/ 内面：灰色N5/	外面：タタキのちカキメ 内面：同心円当て具痕、ナデ消し	

第２表　西百塚山19号墳出土埴輪観察表

挿図番号	写真図版	取上番号	種別	器種	トレンチ	層位	法量（ ）内復元値(cm)			胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	備考
							口径	器高	底径					
12-1	20	18-41	埴輪	円筒	T1	流土	－	－	－	密（1㎜程度の砂粒を含む）	良好	外面：浅黄橙色10YR8/4 内面：浅黄橙色10YR8/4	外面：ナデ、板ナデか 内面：ナデ、ヨコハケ	
12-2	20	18-46	埴輪	円筒	T1	流土	－	－	－	やや粗（1～2㎜程度の石英、長石等を多く含む）	良好	外面：浅黄橙色10YR8/4 内面：浅黄橙色10YR8/4	外面：タテハケ、ヨコナデ 内面：ヨコハケ、指オサエ	
12-3	20	18-10	埴輪	朝顔	T1	流土	－	－	－	密（1～2㎜程度の砂粒を含む）	良好	外面：浅黄橙色10YR7/4 内面：浅黄橙色10YR7/4 赤彩：明赤褐色2.5YR5/6	外面：粗いタテハケ 内面：摩滅激しく調整不明	赤彩
12-4	20	18-17	埴輪	朝顔	T1	流土	－	－	－	密（1～3㎜程度の砂粒を含む）	良好	外面：浅黄橙色10YR8/4 内面：浅黄橙色10YR8/4 赤彩：赤橙色10R6/8	外面：粗いタテハケ、突帯貼り付け後ナデ 内面：粗いヨコハケ	赤彩
12-5	20	18-23	埴輪	朝顔	T1	流土	－	－	－	密（1㎜程度の砂粒を含む）	良好	外面：浅黄橙色10YR8/4 内面：浅黄橙色10YR8/4 赤彩：赤橙色10Y6/8	外面：粗いタテハケ 内面：粗いヨコハケ	赤彩
12-6	20	18-8,16	埴輪	朝顔	T1	流土	－	－	－	密（1㎜以下の石英、長石等を多く含む）	良好	外面：浅黄橙色10YR8/4 内面：浅黄橙色10YR8/4	外面：摩滅激しく調整不明 内面：粗いヨコハケ	
12-7	20	18-2	埴輪	朝顔	T1	流土	－	－	－	密（1㎜程度の砂粒を少量含む）	良好	外面：浅黄橙色10YR8/4 内面：浅黄橙色10YR8/4	外面：摩滅激しく調整不明 内面：摩滅激しく調整不明	
12-8	20	18-35	埴輪	朝顔	T1	流土	－	－	－	やや粗（1㎜程度の石英、長石等を多く含む）	良好	外面：浅黄橙色10YR8/4 内面：浅黄橙色10YR8/4	外面：突帯貼り付け後ナデ 内面：摩滅激しく調整不明	
12-9	20	18-4	埴輪	朝顔	T1	流土	－	－	－	やや粗（1～2㎜程度の石英、長石を含む）	良好	外面：浅黄橙色10YR8/4 内面：浅黄橙色10YR8/4	外面：突帯ヨコナデ 内面：摩滅激しく調整不明	
12-10	20	18-9	埴輪		T1	流土	－	－	－	密（1㎜以下の石英、長石を含む）	良好	外面：浅黄橙色10YR8/4 内面：浅黄橙色10YR8/4	外面：粗いハケ 内面：指オサエ、ナデ	
12-11	20	18-7	埴輪	蓋形	T1	流土	－	－	－	密（1㎜程度の砂粒を含む）	良好	外面：浅黄橙色10YR8/4 内面：浅黄橙色10YR8/4	外面：摩滅激しく調整不明 内面：摩滅激しく調整不明	内面に剥離痕
12-12	20		埴輪	円筒	T1	流土	－	－	－	やや粗（1～2㎜程度の石英、長石を多く含む）	良好	外面：黄橙色7.5YR7/8 内面：黄橙色7.5YR7/8	外面：摩滅激しく調整不明 内面：摩滅激しく調整不明	18号墳

第３表　西百塚山19号墳出土土器観察表

挿図番号	写真図版	取上番号	種別	器種	トレンチ	層位	法量（ ）内復元値(cm)			胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	備考
							口径	器高	底径					
13-1	21		須恵器	無高台坏	T2	表土			(8.0)	密（1㎜以下の石英、長石等を含む）	良好	外面：赤褐色10R5/4 内面：褐灰色10YR6/1	外面：回転ナデ、回転糸切りのちナデ 内面：回転ナデ	
13-2	21		須恵器	無高台坏	T2	表土				密（1㎜以下の石英、長石等を含む）	良好	外面：灰白色５Y8/1 内面：灰色７．５Y6/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
13-3	21		須恵器	皿	T2	表土	(9.8)	2.35	(6.4)	密（1㎜以下の石英、長石等を多く含む）	良好	外面：にぶい橙色５YR6/4 内面：にぶい橙色５YR6/4	外面：回転ナデ、回転糸切りのちナデ 内面：回転ナデ	須恵器皿E
13-4	21		須恵器	坏	T2	墳裾流土			5.4	密（1㎜以下の石英、長石等を多く含む）	良好	外面：灰色５Y5/1 内面：灰色５Y5/1	外面：回転ナデ、ヘラ切り 内面：回転ナデ	
13-5	21		須恵器	坏	T2	流土				密（1㎜以下の石英、長石等を多く含む）	良好	外面：褐灰色５YR6/1 内面：褐灰色５YR6/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
13-6	21		須恵器	坏蓋	T2	墳裾流土	(11.2)			密（1㎜以下の石英、長石等を含む）	良好	外面：黄灰色2.5Y6/1 内面：黄灰色2.5Y6/1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	
13-7	21		須恵器	坏蓋	T2	2層				密（1㎜以下の石英、長石等を含む）	良好	外面：灰白色2.5Y7/1 内面：灰白色2.5Y7/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
13-8	21		須恵器	甕	南東斜面	表採				密（1㎜以下の石英、長石等を含む）	良好	外面：灰色５Y5/1 内面：灰色５Y6/1	外面：平行タタキ 内面：同心円当て具痕	
13-9	21	19-2	須恵器	坏か皿	T3	表土	－	－	(6.4)	密（1㎜以下の砂粒を含む）	良好	外面：灰色7.5Y6/1 内面：灰色7.5Y6/1	外面：回転ナデ、回転糸切り、ヘラケズリ 内面：回転ナデ	
13-10	21		須恵器	坏	T3	表土	－	－	－	密（1㎜以下の砂粒を含む）	良好	外面：灰白色5Y6/1 内面：灰白色5Y7/2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
13-11	21		須恵器	坏蓋	T3	表土	－	－	－	密（1㎜以下の砂粒を含む）	良好	外面：灰白色7.5Y7/1 内面：灰白色7.5Y7/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
13-12	21		須恵器	坏蓋	T3	表土	－	－	－	密（1㎜以下の砂粒を含む）	良好	外面：灰白色7.5Y7/1 内面：灰白色7.5Y7/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
13-13	21		須恵器	坏蓋	T3	表土	－	－	－	密（1㎜以下の砂粒を含む）	良好	外面：灰色N6/ 内面：灰白色N7/	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
13-14	21	19-1	土師器	甕？	T3	12層	－	－	－	密（1㎜以下の砂粒を含む）	良好	外面：浅黄橙色10YR8/4 内面：浅黄橙色10YR8/3	外面：摩滅激しく調整不明 内面：摩滅激しく調整不明	19号墳以前か

1. 西百塚山古墳群遠景

2. 西百塚山19 号墳全景

3. トレンチ１全景

4. トレンチ１盛土

5. トレンチ１墳裾Ａ案

6. トレンチ１墳裾Ｂ案

7. トレンチ 1 埴輪出土状況

8. トレンチ 2 全景

9. トレンチ 2 盛土

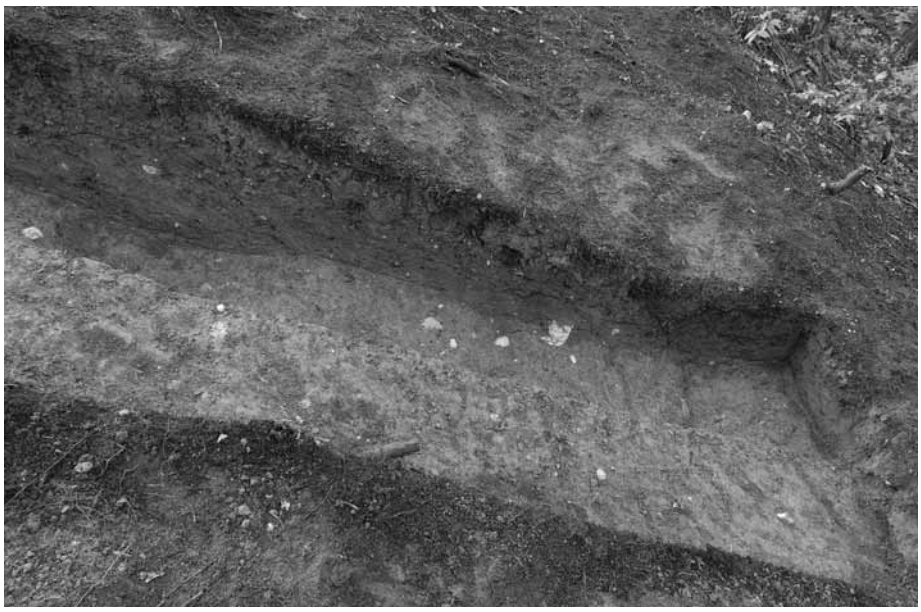
10. トレンチ 2 墳裾

11. トレンチ 3 全景（南から）

12. トレンチ 3 全景（北から）

13. トレンチ 3 盛土

14. トレンチ 3 墳裾Ａ案

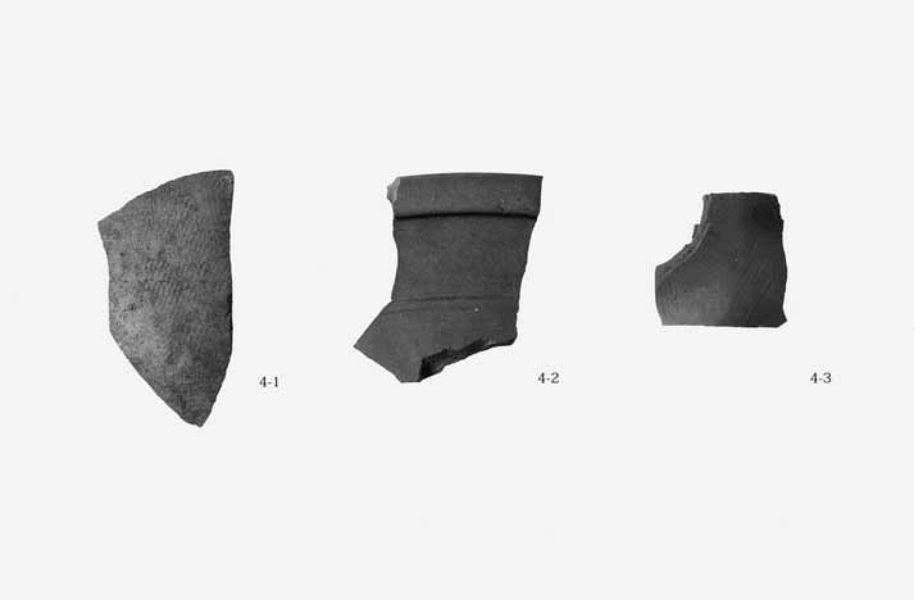


15. トレンチ 3 墳裾Ｂ案

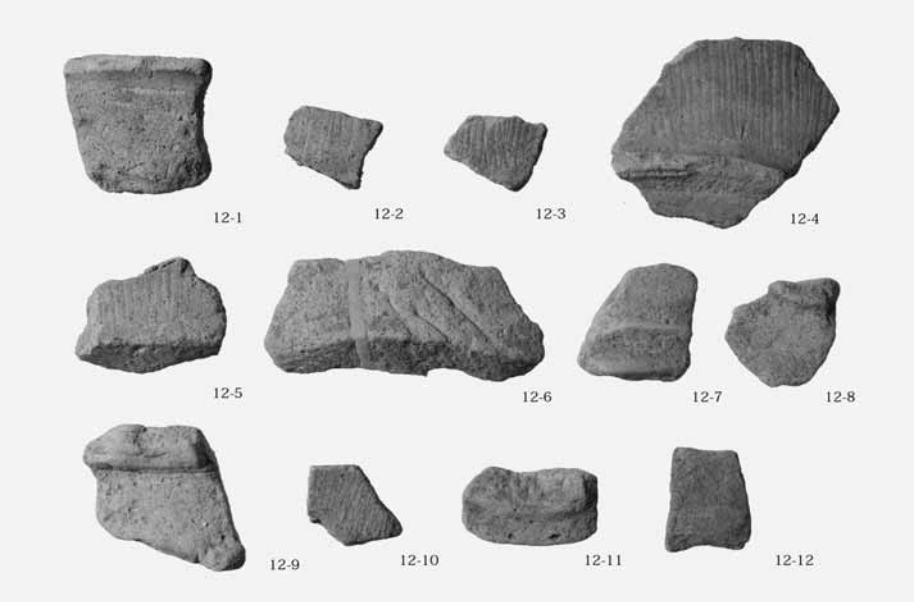
16. トレンチ 4 全景

17. トレンチ 4 墳裾Ａ案

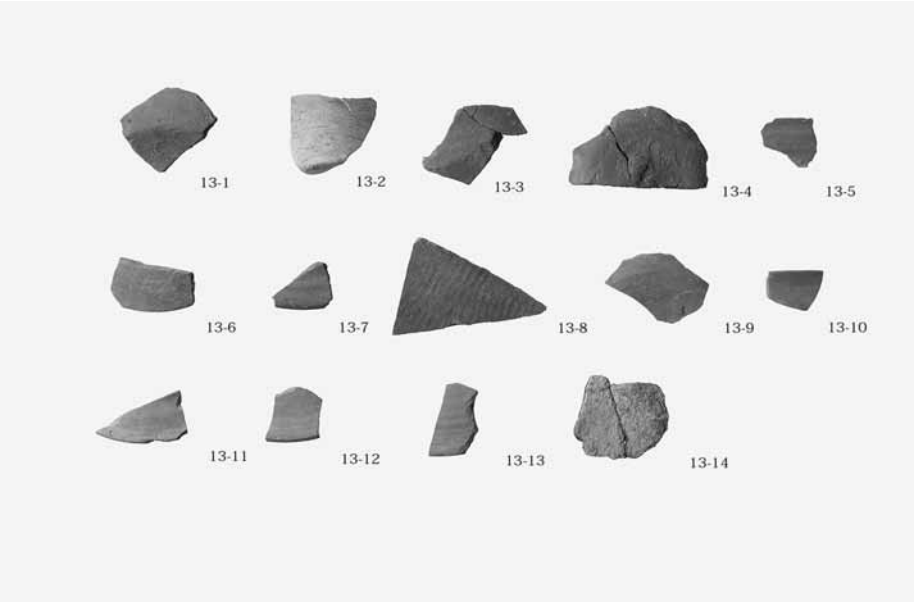
18. トレンチ 4 墳裾Ｂ案



19. 分布調査表採遺物



20. 西百塚山19号墳出土埴輪



21. 西百塚山19号墳出土須恵器・土師器